

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	家出まへ : 創作
Author(s)	竹崎, 瀧
Citation	龍南, 2 2 2 : 2 6 - 3 6
Issue date	1932-07-03
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7070">http://hdl.handle.net/2298/7070</a>
Right	

創作

# 家出まへ

文三甲二 竹 崎 瀬

目をさますと部屋の中は薄暗かった。

机の上の目覚時計だけがたつた一つのものゝ様に音を立てゝゐた。僕の眠つたのは未だなまぬい太陽が窓のところ  
でためらつてゐた時だつたから二三時間も眠りこんだのであらうがその間にまるで流行や風習さへも變つた様な氣がし  
た。眠りをつとめて愛したり欲したりするまでもなく全く虚心にその中に這入つて行つたのは久し振りのことだつたか  
らである。

暗さの中では花瓶も花も見えない、這ひ廻る影も無い。明るさの中では混亂する此頃の自分の姿を考へた時暗さは甘  
酸い快樂を與へた。僕の血は緩やかに体のいろんな部分で丁寧に関心を整頓しながら僕の頭腦の部屋に這入つて行く。  
僕はいま考へることが出来る。それは酸味を誘ひ出させる唾液の流出の如くかすかな痛みを僕に與へる、久しい間こん  
なやうな痛みを感じたことは無かつた。

僕はふと自分の中に戻つてゆく、そして今日守田に喋つた自己の氣持はまるで蜃氣樓に過ぎないのではないかと思ひ

出した。

僕は一ヶ月前から母に小使をねだることの出来ない自分を悲しく思つた。外へ出ると自然とポケットマネイがほしくなる、それで長い間、家の狭い圓周の範圍しか出たことがなかつたにかゝわらず守田が誘ひ出しに來た時さほど氣乗りもしなかつた。すると風邪のなほりきらない桂子は幾分鼻にかゝつた聲で蒼ざめた顔に微笑を浮べながら云つた。

『出て行つてゐらつしやいまいしよ、こんなに晴れてゐるんですもの』  
そして附け加へた。

「あたしも今日は出てみよう……」

彼女は妹——雅子——と一緒に哲學堂あたりへ出かけるといふのだ、僕は何かを感じながら單に言葉だけで訊いてみる。

「体はもう大丈夫だらうか？」

桂子は笑ひながら頷いた。僕は彼女の体が未だ無理だと思つたがとりたてゝ反對しなかつた。僕は彼女を見る、と同時に僕は彼女に見かへされてゐる自分に氣付く、二人の出會つた目の中で變てこに戰つてゐるものがある。ふと僕は滑るのを感じる、そして轉んだ時の様な滑稽な哀愁が交錯して二人を當惑させた。

家の中の桂子を中心とした無言の不安さはこの位のことで僕をどぎまぎさせるのであらうか。何んと言ふことだ。過ぎ去つた愛の日々は既に昇天した。今は際限のない墜落である、そこでは思考力や、時としては感情さへもなくなつて

しまふ。夢の中のやうに笑ふことも涙を流すことも戀をすることも出来るかも知れないがそれはたつた指の一觸れで實に稀薄に廣がつてしまふ。この墜落は習慣を生むものだ。僕等は碎かれた花束から花びらや葉っぱを見出しながら無痛な炎症に慣れてゆく。

僕と守田は外に出る。冬と云ふのによく晴れた青空、野を歩いてゐると体の何處かで分泌物が軽く出て来る様な気がする。褐色になつて枯れてゐる草を足で踏むことは其の度々に僕の氣を軽くする様に感ずる、僕はふと枯草に目をなげてこんな朗らかな冷い空の下でほんの一かたまりの靜寂にすら氣がつくのはやはり自分の神經が体と同じやうにひどく疲れてゐるのだと今さらの様に感じた。さう思ふと自然の下に晒されたらきつとサツパリするだらうと思つてゐた心の中に汚點が見えて世間の誰でもが當然の如く無意識に味つてみる快樂にさへつまらない陰がさした。僕はこの親切な友人の言ふことにも眞理があることを知つてゐるのだがそんな風な蔭翳が急に僕を頑なにしてしまつた。

二人は野を横切つて中井驛の踏切を渡りセルパンによく出す詩人某の顔に時折ぶつかる喫茶店ワゴンに入つた。健ちゃんは血色の好い顔に笑を浮べて

「やあ久し振りですね」

と云つた。

僕等が椅子にすわるや否や、健ちゃんは

「今田邊さんと Die Neue Sachlichkeit についての議論をしてゐたのですよ

……肉体的なもの、精神的なもの、これらの内部における明瞭、單純、確實な線、それが新<sup>ノイエ、ザハリヒカイト</sup>郎物主義である。しかしネ

それは決して寫實主義と自然主義に歸着しないから

*eine besetzte Sachlichkeit* と呼んでいいでせうネ」

と、新郎物主義の主義を僕等の前に披露した。二人はこの新しい文學上、繪畫上のイズムに對して大して興味をそゝられることもなく、

「さあ！」

と氣のぬけた様な返事をした。

二人は別な考へ事があると云つた様に、ガラス戸の落書に目をやつてゐた、

「……だが僕の書棚からでもテーブルからもアフロデイトの神は出て來やしない、それに……」

彼がバツトの箱を差出しても僕は自分の煙草の這入つてゐるポケットを叩きながら頭さへ振らずに喋り出した、健ちゃんの新郎物主義論もなりを靜めた。僕は例へ喋ることに意味がなくてもその音響で心の空隙を滿そうとしてゐる様にさへ見えた。

「肉体が藝術を吸収しなくなつたんだ。……僕は書くことも出来るかも知れない、だが書くことに依つて慰められない、つまり自己の排泄物によつて思案出來ないんだ。」

「生活が……」

「生活がねえ……」

僕は守田の云ひ出そうとしたことを中繼ぎしようとしたまゝ言葉を切つてコーヒーをすゝつた。

「……今ね、僕はコーヒー茶碗の端に齒をぶつけたよ、生活の中ではいつもこんな蹟きだらけだよ」

「だが君は今ひどく疲れてゐるからだよ。蹟くことが君にいい感覚やセンチメントを與へてゐたこともあつた様な事をこの間は言つてゐたぢやないか、君は今何でも重たく積み重ねようとする、故意に……」

守田がそう云ふと僕は急に黙つてしまつてコーヒー茶碗に又手をかけた。そして熱い甘いコーヒーを舌で味ひながら胸深くあたゝかみをつたへた。

記憶の破片が僕の頭の中を貫いてゆく。

あの薄暗い部屋の中にきまつて午後三時頃になると庭の向ふ側の竹藪の葉の隙間から數條の光線が流れこんで來るそれは一日の中ごく短い時間なのに桂子はほかの薄暗い時刻には目をあけてゐながらその時は大抵安らかに眠つてゐることが多い、その光線の中で桂子はつやのない彼女の髪の毛と顔を僕は見る。僕は彼女が夢の中でどんなことを考へてゐるのだらうと思ふ、そしてツヤのない自分自身を考へる、自ら（故意に）磨滅に走る僕自身がそこにある、時には彼女は寢息をする。

生活からのジャズのやうな噪音が僕の頭をめぐつてゐる、僕は自分をそこで見失ふ。僕は片意地になる、——荒々しい情熱の日が收縮するとそこに哀れな殘滓だけがあると人が考へる様に僕も考へてゐた、僕がたのまれてゐた、翻譯の仕事の本當にやり始めようとした時、そこに弛緩した疲勞が待つてゐた。それは當り前の事の様に思はれるのであるが僕はひどく混亂しだすのをどうすることも出来なかつた。

彼女は母の小言を毎日きかされた。彼女は失意と悲しみからふところ云つてしまふ、――

あたし何んと貴男の御母さんから云はれてもいゝけれど……あなたが傍に居てくれないから淋しいと思ふの――僕はこの言葉をきいて馬鹿に感傷的になり妙な義侠心を出して彼女をかばつてやらうと思ふ、その爲めの心の苦しみはひどかつた。夜になると僕ははげしい疲労のために夢さへ見ずに死人の様にねむる、それに毎日無爲に暮す僕は朝目を覺すときや夜中に彼女の泣き聲をきくとき目がしらつく程苦痛だつた。僕は必死になる、日數が経つ。そこでは苦痛が快樂とさへなかつた。道化た快樂――落ちてゆくんだ。谷にゆくんだ！ そんな風に叫ぶものが僕にある。

僕は朝と晩新聞をひらくほか何も讀まない。そうしては桂子の枕下に行つてバツトをふかしながらちよつとやさしく云ふ、「僕は何んだつて出来るだらう！」そして目の中では――

さあ、この通りだ参つたか……お前は俺に勉強も考へることさへさせない、だが俺はお前の爲めに家に反逆するとも出来るのだ――と云ふ風に彼女を見る。桂子は僕の目の内部を知つて居る、彼女は黙つて悲しそうにする「どうしたんだ？」さう僕はきいても黙り續ける。それからしばらくしたつてすゝり泣きながら云ふ「あたし……そんなことしてもらはなくてもいゝ……」若しその場合、或る鈍感な種類の女が云ふ氣かも知れない無邪氣な感謝の言葉や満足の愛情が桂子から云はれたならば僕は恐らくそれつきりぐつたりと疲れて起き上ることも出来なかつたであらう。桂子はちやんと知つてゐるのだ。彼女は更に云ふ「……駄目よ。何んか缺けてゐるんですもの、あたしにだけでなく、あなた自身に對して何か大切なものがたりないんだわ……」

僕はそれをきくと眩暈を感じ出すが無謀な力を振つてたほれまいとする。僕は讀まねばならないと思つてゐた獨乙語

の文法書や書かねばならない原稿などに小指ほども觸れずに再び彼女の枕頭でバットをふかす。その煙を見入つてゐると絶ゆることなく僕の體の中で臆病な犬が吠えてゐた。

健ちゃんには僕が來るといつもかける「G線上のアリア」をかけてくれた。新らしく入つて來た客——蒲田の映畫會社の人のいつもの特長のあるほがらかな聲で僕の回想が遮斷される。彼は「やあ」と皆に挨拶して僕等の向ひの椅子に腰をおろす。僕は割合のんきになる。僕はバットに火をつけながら飲んでしまつたコーヒー茶碗の中をのぞく。

「僕この頃桂子に遠ざかり度いと云ふ氣持が起きて來たよ」

と云ふと守田は

「馬鹿な！ 可哀そうと思はんのかねえ」と可なり輕蔑に似たものを口に含ませながら守田の笑ひ聲は變てこに渦を卷いて散つた。すると一瞬しーんとして「アリア」のリズムが僕の印象にくひ入る。靜かだ、皆はだまつて聞いてゐる僕は今守田に對して論じることが出来る、生活に就いて、藝術に就いて、が先づ笑つてやることだ。僕は笑ふことに一生懸命になる。すると笑ひ聲は桂子の暗い顔で陰氣になつた部屋での笑ひと少しも違つてゐない。ぬら／＼した笑ひ聲は少し僕からはなれて、すぐまた意地悪くもどつて來る。

やがて僕は水の中での様に笑へなくなつた。僕はぶいと立ちあがる、守田はもう何も云はなかつた。

さまざまな出來事の記憶の波に流されながら僕は不安を感じない。そこでははつきりと自分が居るからである。次第



に夕暮の暗さの中で僕は鏡なくして自分自身が見えるのを感じる。そこには今日守田と語つた自分と違ふ自分が居る。僕は靜かに横はつてゐる。永い間自分獨りになつたことがなかつたから、そんな僅かな時間に對してさへ變に貧慾であつた。

さうしてゐると窓から二つ三つ向ふの建物の灯が見える。ハワイヤン・ギターを弾く男が近所に居る。

すつかり夜になつてしまつた。郊外の冬の夜は一家楽しくテーブルをかこんで話をするのに絶好だと思ふ、と同時に現在の自分の立場——桂子なる女性を中心とした一家の不氣味な對立的雰圍氣の中で僕は戰慄する。寂しくなる。

熊本時代によくのんだあの酒のことを思ひ出す。

僕は住宅地の細い道に出た。自轉車のライトが近づいて来る。暗いベールの中に其の燈火を見つめる。

新夜の通りの雑踏に嫌惡を感じつゝ少しばかり酔つた足を運ばせる、其の力の抜けた足を……すると通行人達の靴の間に蒼白い桂子の顔がある、僕はそれを踏んではならないとハラ／＼する、然しとう／＼踏まないことに成功して家に歸る、桂子は寝てゐる。僕はぼつんと机の前に坐る、そして埃のついた、ミルの功利輪を開くと何んだか熊本の地をのぞくやうな氣がする、字がくつゝいたり離れたりするのでよくわからない。

さうしてゐる間に夜がだん／＼奥の方に這込て行つて電氣スタンドの蒼穹の中で蚊に似た青い虫どもが力盡きて一匹づゝ落ちた。

やがて桂子は目をさます、そして頭を上げて僕を見る瞬きすると涙が目縁からぼつりと現はれて頬の方に流れる、だん／＼涙のかげで笑ひ出す、彼女は珍しく赤味を帯びた僕の頬から何かを発見する。すると急に今度は色んな涙が始める、その涙を見てゐた僕は——俺はまだ疲れてゐる、そして心は弱りきつてゐる、まだ酒なんか飲んではいけない！と思ふ、すると桂子は僕の膝に近よつて嗅ぐような様子をしながら微笑する、彼女はもう泣くのをやめた。隣の一部屋から雅子が二本の菊をもつて這込つて来る。

「桂子姉さん、とても綺麗でせう、今お母さんと驛の近くまで行つて買つて來たのよ」

と云ふ、一つはありふれた黄色ののだつた。もう一つは高貴なクリーム色の生氣に満ちた花を四つ五つ咲かせてゐた。

桂子は之れを植ゑようと云ひ出した、僕はびつくりして、たしなめる様に云つた。

「お止しつ、こんな夜更けに、冷たい空氣にあたると又熱が出るよ」

「だつて明日になつたら枯れるかも知れないじゃないですこと、直ぐ出来るから見ていらつしやい。」

花と云へばいつも夢中になる桂子は床から起き上つた。桂子の言葉には不思議に引き止められない力があつた。僕はそれつきり黙つてゐた。

「ねえ、電燈を庭まで出して下さない。」

と下駄をはきながら云つた、僕はだまつて出してやつた。

夜は浅い眠りを眠つてゐて今にも目をさましそうだ、日中にはあんなに晴れてゐた空はすき間なく眞黒になつて、何處からともなく異様な風がやつて來た、あたりの家では灯は消してゐる、庭は僕の出した電燈の光をわずかに受けて常

緑樹がつやの無い表をにぶく光らせてゐた、枯れた雑草の中で桂子は腰を屈めて黒い土を掘つた、彼女は黄色のを植え終り、それを嗅いだ、そしてもう一つのクリーム色の變種のを植ゑるため再び穴をほり始め、何かぬかづく様にして蒼白い骨張つた顔をその花びらの方に近づける、僕はぼんやりとそれを眺める。夢だ！ うづ高く堆積した疲労素の中から萌え出た夢、その新しい夢の中で僕は物象や生活や知性に妨げられることなく自分自身を見出す、そこには陰がない物体だけだ。そこには人間がある、その外には何もない、僕は縁に立ちつくしたまゝ桂子を見てゐる、僕は今靜かに情熱を持つ過ぎ去つた旅行の汽車の中で海岸で、湖水で、山で、シネマのほの暗さの中で……彼女の細長いピンクの爪、弾力のある皮膚、ぬれた唇、そして絹の様な感情、に對して散布した僕の如何なる愛慾よりも嘘つきでない愛慾がそこにある、どんな青春の時間よりも美しい時間！

何處かの家で柱時計が鈍く一時を打つた、最後の省線のゴーと云ふ幽靈の様なうなりが暗黒の中に吸ひ込まれて行つた、重苦しい闇の中から風が鞭のやうに喰り出した、屋根の上では一つ二つの雨音がする、それでも桂子は續ける。シヤベルの金が土の中の小石に笑き當る音がする——嵐が来る、病後の彼女を家に入れないと考へながらそれで彼女が植ゑ終るまで茫然としてゐるより外はない。

僕等の疲労と疲労の極限の興奮の間で高貴な菊の花は明る日になれば風雨のために花びらを散らしてしまふかもしれないと云ふ不安にすら剛然と無關心の暗さの中で揺れてゐる……。

其の翌日桂子の家から送つて來た小使で彼女はショールを買ふと云ひ出した、雅子も持たないので雅子にも買つてや

家 出 ま へ

— ( 美 ) —

れと言ふと雅子はあとでわかつたのだが氣の毒がつて遠慮する、そうしたちよつとした動機で家中に前夜豫想した嵐が  
來た、他人事でない自分自身に……

そして彼女に……

僕は其の日の午後、曇つた空の下で寂しく、併し反抗に興奮させながら家を出て行つた。

( 終り )

一九三二・六・一〇・作